

(参考) STRの考え方について (1)

- **STR (Spread to Tick Ratio)** とは、名目スプレッド（最良売気配値段と最良買気配値段の差）が、呼値の単位で何本分に相当するかを示す指標であり、銘柄の流動性に対する呼値の単位の水準を把握するために用いられます

呼値の単位が適切な場合
(例：STR=3.0)

売り	価格	買い
100	3,005	
100	3,004	
200	3,003	
400	3,002	
	3,001	
	3,000	
	2,999	400
	2,998	200
	2,997	100
	2,996	100
	2,995	100

1
2
3

呼値の単位が粗すぎる場合
(例：STR=1.0)

売り	価格	買い
400	3,005	
200	3,004	
800	3,003	
500	3,002	
1,000	3,001	
2,000	3,000	
	2,999	2,200
	2,998	1,500
	2,997	400
	2,996	800
	2,995	900

1

呼値の単位が細かすぎる場合
(例：STR=6.0)

売り	価格	買い
	3,005	
200	3,004	
	3,003	
100	3,002	
	3,001	
	3,000	
	2,999	
	2,998	
	2,997	
	2,996	200
	2,995	

1
2
:
6

STRの計算方法

最良売気配値段（3,002円）と最良買気配値段（2,999円）の差（3円）は、呼値の単位（1円）3本分であるため、STRは3.0となります。

呼値の単位を細かくすることで価格改善（2,999.5円等での執行）が見込まれます。

注文が分散して円滑な取引が出来なかったり、値動きが激しくなる恐れがあります。

(参考) STRの考え方について (2)

- 東証では、STRの適切な範囲を1.5から5.0と位置づけ、銘柄ごとに適用する呼値テーブル（呼値の単位）を1年ごとに見直します。

表：評価期間におけるSTR値に対する評価及び定期見直しで適用する呼値テーブルについて

STR	1.5未満	1.5～5.0	5.0超
評価 (考え方)	流動性に対して呼値の単位が粗い (より小さい呼値の単位が適切)	適切なSTR範囲 (現在の呼値の単位が適切)	流動性に対して呼値の単位が細かい (より大きい呼値の単位が適切)
呼値テーブルA	残留（呼値テーブルA）	残留（呼値テーブルA）	呼値テーブルBを適用
呼値テーブルB	呼値テーブルAを適用	残留（呼値テーブルB）	呼値テーブルCを適用
呼値テーブルC	呼値テーブルBを適用	残留（呼値テーブルC）	残留（呼値テーブルC）
呼値テーブルO	売買単位が1株（口）専用テーブルのため、STRに基づくテーブル間の移動はなし		